

学校教育目標：「向学 自主 協働」

校訓：「夢を実現」



川通中だより

令和6年6月3日 第3号
さいたま市立川通中学校
TEL 048(799)1061
川中キャラクター ホームページ



～スローガン：「一生懸命はかっこいい」～

生きる希望と心の支え

校長 鈴木 純

ついこの間まで、さわやかな風が頬に心地よく感じられましたが、台風1号と梅雨前線の関係で湿度も上昇、いよいよ梅雨の時期の到来となりました。通勤路の民家の庭先では菖蒲が赤紫色の花を咲かせ、紫陽花もちらりほらりと咲いている様子が見られます。

そんな中、いよいよ、さいたま市学校総合体育大会が始まります。3年生としては最後の大会となります。本校は、全校の生徒数が少ない中ですが、川中ならではのチームワークで、臆することなく「一生懸命はかっこいい」のスローガンのもと、普段通りの力が発揮できることを期待しています。ぜひ、悔いの無いよう大会に臨んでください。

さて、話は変わりますが、体育の指導をされていた先生の話です。この先生は、今年の4月、78歳でお亡くなりになった星野富弘さんです。ある理由で、体育の指導ができなくなりましたが、その後、詩人・画家としての道を歩まれ、多くの人に共感や感動、生きる力を与えてくださった方です。

出身は群馬県みどり市(現在)、得意種目は器械体操で、スポーツ万能の先生でした。実は、あることをきっかけに先生を続けられなくなってしまいました。それは、星野さんが中学校の先生になって間もなく、クラブ活動中に生徒への模範演技中にマット上で宙返りをしていた時、失敗して頭から落ちてしまったのです。若くて、「たくさんのことを生徒に教えたい」、そんな矢先での事故です。星野さんは、体操選手に失敗はよくあること、すぐに起き上がろうとしたのですが、首から下の感覚がすべてなく、全く動けなくなってしまい「これからずーっと、このまま寝ていなければならないのかな……」と思ったそうです。病院に運ばれ、わかったことは「脊髄損傷」、手足の自由が奪われてしまいました。幾度となく大手術をし、長期にわたる入院生活を余儀なくされることになりました。

入院中は、生死をさまよったこともあったそうです。ご家族の献身的な介護の様子や病院の先生や看護師さんとのやり取り、同室している入院患者との心温まるエピソードもあり、その中で、聖書の言葉との出会いや作家の三浦綾子さんの小説との出会いが星野さんの心の支えとなってきました。

2年後のある日、星野さんのもとに同じ病室で過ごしていた中学生が、都内の病院に転院して寂しい思いをしているという話の中から、寄せ書きを書いてほしいとの話が迷い込みました。首から上しか動かすことができない星野さんは、口に筆をくわえて書いた自分の名前のサインを中学生に贈ったそうです。すると、その中学生はこのほか喜び、そのことがきっかけに星野さんは口に筆をくわえて文字を書き、絵を描くことにチャレンジし始めたそうです。その後、様々な屈折を乗り越えながら、7年後には、前橋市で最初の作品展が開催される運びとなったのです。その内容は、入院中に書きためていた花の絵と数行の入院中の生活から感じられた詩が添えられたものでした。その作品展をきっかけにメディアに取り上げられるなど、全国各地で展覧会が開かれ、訪れた人々に多くの感動を呼びました。私もその一人です。星野さんの不屈の精神、家族の支え、病院の人や友人、様々な人とのかわりが、詩を書き、花の絵を描く活力になったのだと思います。みなさんも興味があったら、学校の図書館に何冊か置いてありますので、読んでみてください。

最後に、たくさんの詩画の中から、心に残った作品を紹介합니다。「なずな」の絵に、次の詩が添えられていました。

「神様が たった一度だけ この腕を動かしてくださるとしたら
母の肩をたたかせてもらおう 風に揺れるぺんぺん草の実を見て
いたら そんな日が本当に来るような気がした」 …感涙



(詩画の掲載については、富弘美術館より許可をいただいております)